Journal of Culture and Information Science, 16（1, 2）, 1-13,（March 2021）

研究論文

方言データから見た岡山方言のアスペクト形式

―YORU と TORU の通時的変化について―

鴨井　修平

西日本諸方言のアスペクト形式である YORU と TORU に関して、従来の研究では個別方言におけるアスペクト体系および両形式のアスペクト機能の詳細が数多く記述されてきた。それと並行的に、個別方言ではアスペクト形式がポライトネス的な意味を標示するという現象も観察されている。しかし、アスペクト形式が標示するアスペクト意味とポライトネス的意味の間の相関関係については不明瞭な点が多く、研究蓄積は不十分である。本稿では、統一的枠組みに基づいて記述した岡山方言のデータより、岡山方言におけるアスペクト形式 YORU（*-joːr-*）と TORU（*-tor-*）のアスペクト機能およびポライトネス的機能の詳細を記述し、両形式の通時的変化の順序を提案した。また両者の間の相関関係については、通時的変化の順序に基づいて、両形式のアスペクト機能の重複がポライトネス的機能における対立を新たに発生させたということを示した。

1．はじめに

本稿では、統一的枠組みに基づいて記述した岡山方言のデータより、岡山方言におけるアスペクトを表す文法形式（アスペクト形式）YORU（*-joːr-*）と TORU（*-tor-*）の通時的変化を考察する。

1．1　研究背景

命題の時間構造を捉える文法範疇のことをアスペクトという。アスペクトは従来の研究蓄積（e.g. Vendler（1967）、Comrie（1976）、金田一（1950）、奥田（1978））を参考にすれば、図 1 のように図示することができる。

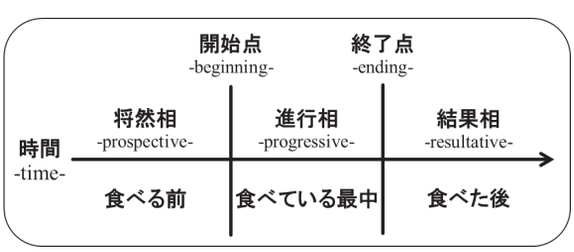

図 1　命題の時間構造

図 1 より、ある命題の時間（time）が左から右に向かうとすると、命題内部の時間構造は開始点（beginning=b）、終了点（ending=e）という 2 つの参照点によって区画される。またこの 2 つの参照点によって区画される命題は将然相（prospective=PROSP）、進行相（progressive=PROG）、結果相（resultative=RES）という 3 つのアスペクトから構成される。例えば「A が魚を食べる」という命題は時間の経過に伴い、食卓に着く（将然相）→魚を咀嚼する（進行相）→魚の骨が残る（結果相）というようなプロセスを経る。（1）に示すように、標準語のアスペクト形式テイル（*-te=i-*）は進行相と結果相を標示するアスペクト機能を持つ。

（1）「魚を食べている」の意味
　a. PROG：今、魚を食べている
　b. RES：既に魚を食べている

標準語のテイルに相当するアスペクト形式として、東日本側（図 2：分割線右側）にはテル（*-te=*（*i*）*-*）という 1 形式が分布しているのに対し、西日本側（図 2：分割線左側）には YORU（*-jor-*）、TORU（*-tor-*）、テルという 3 形式が分布している（『方言文法全国地図第 198 図』（国立国語研

[1] 西日本側に分布するアスペクト形式 *-jor-*と *-tor-*は音声バリエーションが豊富な形式であり、例えば *-jor-u*の音形には [-joɾu]、[-joːɾu]、[-joː]、[-juː]など、*-tor-u*の音↘

究所 1999））[1]。

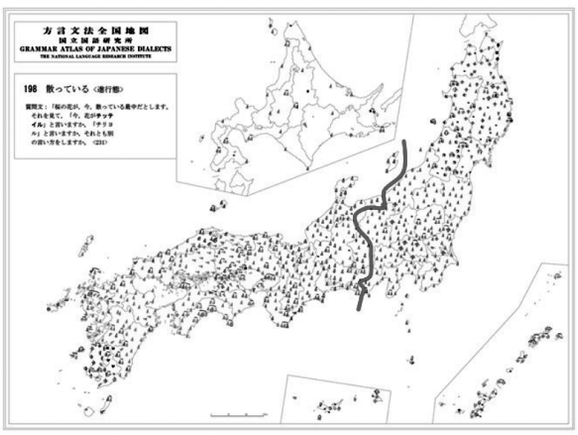

図２　アスペクト形式の分布（分割線は加筆）

ある命題のアスペクトを標示する際、東日本諸方言はテルが進行相と結果相を標示するため、1 形式が 2 つのアスペクトを標示するという点で標準語との類似点を持つ。一方（2）、（3）に示すように、西日本諸方言は YORU が進行相を、TORU が結果相を標示するため、2 形式が 2 つのアスペクトを区別するという点で標準語との相違点を持つ。

（2）「魚、食べよる」の意味
　PROG：今、魚を食べている
（3）「魚、食べとる」の意味
　RES：既に魚を食べている

従来の方言アスペクト研究では個別方言における YORU と TORU のアスペクト機能について数多く議論されてきた（cf. 工藤 2014）。

１．２　問題提起

前述の西日本諸方言と同様、岡山方言もまた、アスペクト形式 YORU（音形は [-joːɾu]）と TORU（音形は [-toɾu]）を用いて異なるアスペクトを区別する方言である。（4）、（5）に示すように、YORU は将然相、TORU は結果相を標示するという点で両形式のアスペクト機能は対立している[2]。

（4）PROSP：部屋に入ると、座る直前の A がいた
　a. A、座りょーる
　b. *A、座っとる
（5）RES：部屋に入ると、座っている A がいた
　a. A、座っとる
　b. *A、座りょーる

（4）は、将然相の局面において、YORU の使用は文法的、TORU の使用は非文法的であることを表している。また（5）は、結果相の局面において、TORU の使用は文法的、YORU の使用は非文法的であることを表している。しかし、（6）に示すように、YORU と TORU は進行相を標示するという点で両形式のアスペクト機能は重複する場合がある[3]。

（6）PROG：運動場で走っている最中の A がいた
　A、走りょーる / 走っとる

（6）は進行相の局面において、両形式の使用が文法的であることを表している。

ここで、YORU と TORU が進行相のアスペクト上に生起する際、両形式の間に機能的対立はないのだろうかという問題を提起する。自然言語の経済性（Martinet 1962）に基づけば、2 形式を用いて 1 つの意味を表すのは非合理的である。よって YORU と TORU は進行相のアスペクト上においても何らかの意味を区別していることが示唆される。さらに、（7）に示すように、岡山方言では聞き手 B の属性によって YORU と TORU が使い分けられるという現象も観察される。

（7）PROG：運動場で走っている最中の A がいた
　a.（B= 友人）A、走りょーる
　b.（B= 知人）A、走っとる

（7）は、命題が進行相の局面であるということを聞き手に対して発話する際、友人に対しては YORU が使用されるのに対し、知人に対しては TORU が使用されることを表している。しかし、どのような規則に基づいて両形式が対立しているのかは不明瞭である。

本稿では、YORU と TORU のアスペクト機能

↘形には [-toɾu]、[-tɛoɾu]、[-toː]、[-tɛuː]などがある。本稿では *-jor-u*の音形を全て YORU、*-tor-u*の音形を全て TORUと表記する。

[2] YORU・TORU という形態的に異なる形式が、各々異なる意味に対応し区別している現象のことを「対立」と呼ぶ（cf. 工藤 1995）。

[3] YORU・TORU という形態的に異なる形式が、同じ意味に対応している現象のことを「重複」と呼ぶ（cf. 鴨井 2017）。

を中心に岡山方言のアスペクト体系を記述し、両形式のアスペクトに関する機能的重複と聞き手に関する機能的対立の間の相関関係を明らかにする。

2. 先行研究

本章では、岡山方言の文法的特徴を記述した先行研究および西日本諸方言のアスペクト形式 YORU と TORU が話し手の心的態度を標示する機能（ポライトネス的機能）を持つことを報告した先行研究を挙げる[4]。

2. 1　岡山県の方言区画

岡山県は、東側で兵庫県、西側で広島県、北側で鳥取県と隣接しており、南側には瀬戸内海・四国地方を臨む。総人口は約 190 万人であり、文化的中心部である岡山市と倉敷市に総人口の約 60% が集中している。近年では県外からの移住者も多い。

図３　岡山県地図

岡山方言の文法について記述した虫明（1982）より、岡山県は備前・備中・美作のように旧国名により区分することはできるが、音韻・文法に関しては特筆すべき方言差がなく、他方言において設定するような方言区画を同様に設定することは適切ではない。本稿においても同様、岡山方言の方言区画を設定することなく、岡山県全域を調査対象として網羅的に方言データの収集を行う。

2. 1　アスペクト形式のポライトネス的機能

西日本諸方言のアスペクト形式がアスペクト以外の意味を標示する現象は、多くの先行研究が指摘しているが、本稿では、アスペクト上における 2 形式の機能的対立に着目した先行研究として井上（1998）と岡（2018）を挙げる。

まず、近畿方言のアスペクト形式を記述した井上（1998）によれば、大阪方言ではテルと TORU の 2 形式が進行相上もしくは結果相上に生起するが、(8) に示すように、TORU の方は話し手の心的態度（主に卑罵・ぞんざい）を表す。

(8) PROG：犬が鳴いている
　a. 犬、鳴いてる
　b. 犬、鳴いとる（鳴き声をうるさく思うとき）

(8) は、進行相の局面において、両形式の使用が文法的であることを表しているが、テルが単にアスペクトを標示するための無標形式（ニュートラル）であるのに対し、TORU は話し手の態度を表すための有標形式であると分析できる。井上（1998）はこのようなアスペクト形式のポライトネス的機能について、命題内容の相違から観察される現象を中心に指摘しているが、岡山方言においても同様の現象は観察され得るだろうか。

これについて、岡山方言のアスペクト形式を記述した岡（2018）によれば、岡山方言では YORU と TORU の 2 形式が進行相上に生起するが、(9) に示すように、YORU の方は話し手の心的態度（主に親しさ・心配・迷惑）を表す。

(9) PROG：子供が泣いている
　a. 子供、泣いとる
　b. 子供、泣きょーる（子供が心配なとき）

(9) は、進行相の局面において、両形式の使用が文法的であることを表しているが、TORU がニュートラルであるのに対し、YORU は話し手の態度を表すための有標形式であると分析できる。岡

[4] 会話場面において、話し手と聞き手が互いに良好な関係を保つために行う言語的配慮のことをポライトネスという。日本語における「- ます」のような丁寧語や「- られる」のような敬語のように、形式の標示する丁寧さや礼儀をポライトネスとする研究もあれば、実際の会話場面において話し手と聞き手の間で生じる配慮や距離感のように、形式によって標示されるとは限らない心的概念をポライトネスとする研究もある（cf. Brown & Levinson 1987）。本稿では、話し手の心的態度に関する意味（e.g. 卑罵、心配、配慮）をポライトネス的なものとして扱い、それらを標示する機能のことを総称して「ポライトネス的機能」と呼ぶ。

（2018）もまた、このようなアスペクト形式のポライトネス的機能について、命題内容の相違から観察される現象を中心に指摘しているが、聞き手の相違においても同様の現象は観察され得るだろうか。前述したように、岡山方言では（7）のような現象が観察されるため、命題内容のみならず聞き手の相違という観点からも分析を行う必要がある。

3. 研究方法

本章では、岡山方言の YORU と TORU の機能について網羅的な記述を行い、両形式の機能的対立と機能的重複の全体像を把握するための方法論を示す。

3.1 統一的枠組みの設定

本研究では、岡山方言のアスペクト体系を統一的枠組みに基づいて網羅的に記述するために、2 種類の命題の時間構造を設定する。まず図 4 に示すように、進行相を持つ命題の時間構造は、開始兆候点（signal of beginning=sb）、開始点、終了点、結果終了点（result ending=re）という 4 つの参照点と将然相、進行相、結果相という 3 つのアスペクトから構成される。前述と同様、「A が魚を食べる」という命題は、時間の経過に伴い、食卓に着く（将然相）→魚を咀嚼する（進行相）→魚の骨が残る（結果相）というようなプロセスを経る。このような時間構造を持つ命題を命題 α とする[5]。

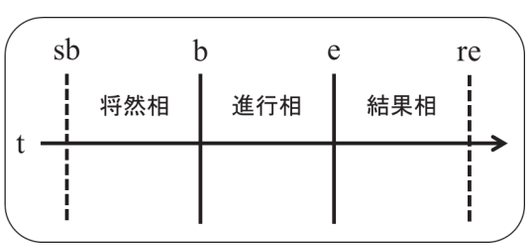

図４　命題αの時間構造

一方、図 5 に示すように、進行相を持たない命題の時間構造は、開始兆候点、開始 / 終了点、結果終了点という 3 つの参照点と、将然相、結果相という 2 つのアスペクトから構成される。例えば「火が消える」という命題は、時間の経過に伴い、火が弱くなる（将然相）→火が消え、煙が上る（結果相）というようなプロセスを経る。このような時間構造を持つ命題を命題 β とする[6]。

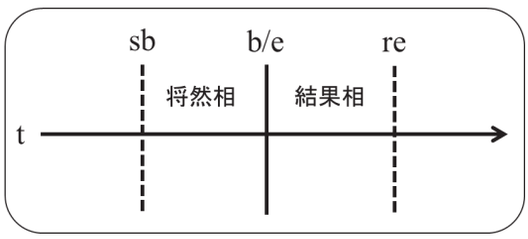

図５　命題βの時間構造

本稿では、前述の命題 α と命題 β において、岡山方言の YORU と TORU がどのアスペクト上に生起し得るのかを詳述し、岡山方言のアスペクト体系を明らかにする。

3.2 調査概要

本研究では、図 6 に示すように、方言 X の全体像（母集団）は方言 X を母語とする地区および年齢層の話者（標本）によって特徴づけられると考える[7]。

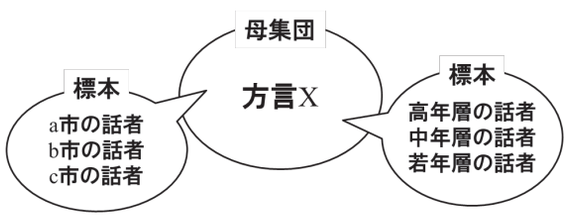

図６　方言 X と出身地・年齢層の関係

この方法論を採用すれば、地理的バリエーションと通時的バリエーションを考慮しつつ岡山方言の全体像を捉えることができる。

調査は、虫明（1982）の指摘と筆者の予備調査の結果に基づいて、次の 3 地区を出身地とする

[5] 金田一（1950）や Vendler（1967）の動詞分類から見れば、「走る」、「食べる」などの継続動詞（activities）や「作る」、「焼く」などの達成動詞（accomplishments）が命題 α の述語となる。

[6] 金田一（1950）や Vendler（1967）の動詞分類から見れば、「死ぬ」、「消える」などの瞬間動詞（achievements）が命題 β の述語となる。また「ある」、「いる」などの状態動詞（states）を述語とする命題は時間構造を持たない命題であるため、本稿では、アスペクト形式との共起関係におけるデータ提示を割愛する。

[7] 母集団と標本は集合と部分集合の関係にあり、標本には母集団の性質が反映されている。本研究における方言データの収集方法は、母集団から抽出した標本を分析することで母集団の性質を明らかにするという統計学の方法論より着想を得ている。

[8] 備前地区・備中地区・美作地区を出身地とする話者（各 2 名ずつ）に対して YORUと TORUのアスペクト機能およびポライトネス的機能に関する予備調査を行った結果、地区における方言差は観察されなかった。

岡山方言母語話者を対象に実施した[8]。

［備前地区］岡山市、備前市、赤磐市、和気郡
［備中地区］倉敷市、笠岡市
［美作地区］津山市、真庭市、美作市

また、次の基準を満たす若年層（18-39 歳）、中年層（40-69 歳）、高年層（70 歳以上）の話者を岡山方言母語話者（インフォーマント）とし、各年齢層につき各地区から 3-4 名ずつ（合計 30 名）のインフォーマントに対して同様の質問項目を用いてインタビュー調査を行った。

［1］1-18 歳までを調査対象の地区内で生活した
［2］地区外における外住歴が合計 5 年未満である

インタビュー調査では、各アスペクトと対応する個々の命題を合計 40 例ほど提示し、その命題において使用する形式を［YORU、TORU、その他］の中から複数選択させ回答を得た[9]。提示する命題の述語となる動詞は、金田一（1950）や Vendler（1967）の動詞分類を参考に選定している。さらに、個々の命題においてニュートラルである形式や命題内容、聞き手の相違によってポライトネス的機能が観察されるかについても詳細な回答を得た。インタビュー調査に用いた命題の一部を次に示す。

［進行相の場面］
運動場に行くと、走っている最中の A がいた
［選択肢］
A が、a. 走りょーる／ b. 走っとる／ c. その他

［仲の良い友人に対しての発話］
運動場に行くと、走っている最中の A がいた
［選択肢］
A が、a. 走りょーる／ b. 走っとる／ c. その他

4. 結果と分析

本章では、統一的枠組みに基づいて網羅的に記述した岡山方言のアスペクト形式 YORU と TORU のアスペクト機能およびポライトネス的機能における調査結果を提示し分析を行う[10]。

また、虫明（1982）の指摘と筆者の予備調査の結果の通り、備前地区・備中地区・美作地区における地理的バリエーションは観察されなかったため、3 地区の方言データを岡山方言のデータとして統合する。一方、若年層、中年層、高年層の間からは通時的バリエーションが観察されたため、本節では年齢層別に方言データを提示する。

4. 1　YORU と TORU のアスペクト機能

本節では、両形式のアスペクト機能における調査結果を提示する。

4. 1. 1　若年層における調査結果

YORU と TORU が命題 α に生起する場合、若年層では YORU が将然相、進行相、TORU が将然相、進行相、結果相を標示する。(10) に例を示す。

(10)「A が走る」のアスペクト
a. PROSP：運動場で走る直前の A がいた
　A、走りょーる / 走っとる
b. PROG：運動場で走っている最中の A がいた
　A、走りょーる / 走っとる
c. RES：運動場で既に走り終えている A がいた
　A、走っとる /* 走りょーる

(10a)、(10b) は、命題 α の将然相あるいは進行相の局面において、両形式の使用が文法的であることを表している。一方（10c）は結果相の局面において、TORU の使用は文法的、YORU の使用は非文法的であることを表している。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する[11]。表 1、表 2 に示すように、命題 α における若年層の方言データからは将然相、進行相のアスペクト上における YORU と TORU の機能的重複が観察された。

[9] 調査時間は 1件につき約 3時間程度である。調査期間は 2017-2020年であるが、各地区・各年齢層に対して一定の調査期間を設定したわけではないため詳細を割愛する。また調査の実施場所についても多岐にわたるため詳細を割愛する。

[10] 岡山方言は筆者の母語である。客観的に岡山方言の事実を記述するため、インフォーマントに筆者は含まれていないが、本稿において提示する岡山方言の事実と筆者の内省は全て一致するものである。

[11] Y=YORU、T=TORU、他 =その他を表す。各表は各年齢層の話者 10名が文法的に使用する形式を複数選択した結果を集計したものである。ここでは主語の属性を問わないため、主語を Aとして提示する。

表１　命題αの将然相における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、スタートラインの手前で手首足首を回す、走る直前のAがいた	10	10	6	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いて箸と茶碗を持つ、食べる直前のAがいた		10	8	0
【焼く】台所に行くと、フライパンに油をひいて魚に手を付ける、焼く直前のAがいた		10	7	0
【書く】部屋に入ると、机の上に便箋を広げてペンを取り出す、書く直前のAがいた		10	8	0
【降る】カーテンを開けると、空が暗く曇っていて雨が降る直前の天気だった		0	0	10

表２　命題αの進行相における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	10	10	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		10	10	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		10	10	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		10	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		10	10	0

表1、表2より、YORUとTORUの機能的重複は進行相上の方がより顕著であることが分かる。また将然相におけるTORUの使用については半数以上が文法的であると判断したものの、揺れが観察される。さらに「雨が降る」のような自然現象の命題に関しては、両形式が将然相を標示する機能を持たないことが分かる。

一方、表3に示すように、若年層の方言データからは結果相のアスペクト上におけるYORUとTORUの機能的対立が観察された。

表３　命題αの結果相における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた	10	0	10	0
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		0	10	0
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		0	10	0
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた		0	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		0	10	0

次に、YORUとTORUが命題βに生起する場合、若年層では、YORUが将然相、TORUが結果相を標示する。(11)に例を示す。

(11)「Aが座る」のアスペクト

a. PROSP：部屋に入ると、座る直前のAがいた
　A、座りょーる /* 座っとる

b. RES：部屋に入ると、座っているAがいた
　A、座っとる /* 座りょーる

(11a)は、将然相の局面において、YORUの使用は文法的、TORUの使用は非文法的であることを表している。また(11b)は、結果相の局面において、TORUの使用は文法的、YORUの使用は非文法的であることを表している。

次に各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。表4、表5に示すように、命題βにおける若年層の方言データからは将然相、結果相のアスペクト上におけるYORUとTORUの機能的対立が観察された。

表４　命題βの将然相における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【座る】部屋に入ると、荷物を置いて椅子を引いた、座る直前のAがいた	10	10	0	0
【死ぬ】道路を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた		10	0	0
【消える】部屋に入ると、火が小さくなって消える直前のロウソクがあった		10	0	0
【消す】部屋に入ると、スイッチに手を伸ばしてストーブの火を消す直前のAがいた		10	0	0
【晴れる】カーテンを開けると、空を覆っていた雲が掃けていき、太陽が見え始めた		10	0	0

表５　命題βの結果相における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【座る】部屋に入ると、椅子に座っているAがいた	10	0	10	0
【死ぬ】道路を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた		0	10	0
【消える】部屋に入ると、さっきまで点いていたロウソクの火が既に消えていた		0	10	0
【消す】部屋に入ると、ストーブの火を消し終えて部屋を換気しているAがいた		0	10	0
【晴れる】カーテンを開けると、雲ひとつない青空が広がっていた		0	10	0

以上の方言データより、岡山方言における若年層のアスペクト体系は、図7、図8のようになると分析できる。

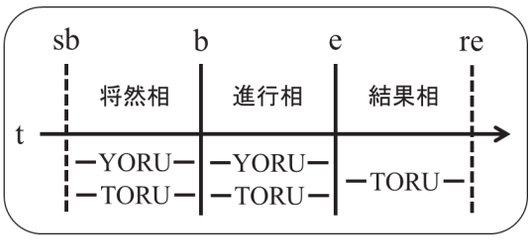

図７　命題αにおけるアスペクト体系（若年層）

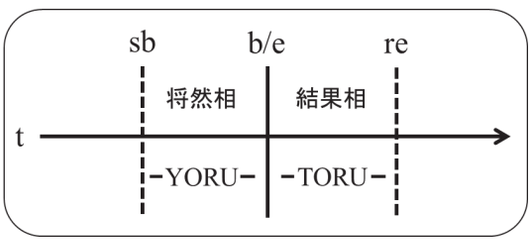

図８　命題βにおけるアスペクト体系（若年層）

4.1.2　中年層における調査結果

若年層と同様、YORU と TORU が命題 α に生起する場合、中年層でも YORU が将然相、進行相、TORU が将然相、進行相、結果相を標示する。用例は（10）と同様であるため割愛し、集計表のみを提示する。

表 6、表 7 に示すように、命題 α における中年層の方言データからも将然相、進行相のアスペクト上における YORU と TORU の機能的重複が観察された。

表６　命題αの将然相における調査結果（中年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、スタートラインの手前で手首足首を回す、走る直前のAがいた	10	10	4	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いて箸と茶碗を持つ、食べる直前のAがいた		10	6	0
【焼く】台所に行くと、フライパンに油をひいて魚に手を付ける、焼く直前のAがいた		10	6	0
【書く】部屋に入ると、机の上に便箋を広げてペンを取り出す、書く直前のAがいた		10	5	0
【降る】カーテンを開けると、空が暗く曇っていて雨が降る直前の天気だった		0	0	10

表７　命題αの進行相における調査結果（中年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	10	10	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		10	10	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		10	10	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		10	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		10	10	0

表 6、表 7 より、YORU と TORU の機能的重複は進行相上の方がより顕著であることが分かる。また、将然相における TORU の使用については約半数が文法的であると判断したものの、若年層よりも許容度が少し下がるという揺れが観察された。

一方、表 8 に示すように、中年層の方言データからも結果相のアスペクト上における YORU と TORU の機能的対立が観察された。

表８　命題αの結果相における調査結果（中年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた	10	0	10	0
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		0	10	0
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		0	10	0
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた		0	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		0	10	0

また若年層と同様、YORU と TORU が命題 β に生起する場合、中年層でも YORU が将然相、TORU が結果相を標示する。用例は（11）、集計表は表 4、表 5 と同様であるため割愛する。

以上の方言データより、岡山方言における中年層のアスペクト体系は、図 9、図 10 のようになると分析できる。

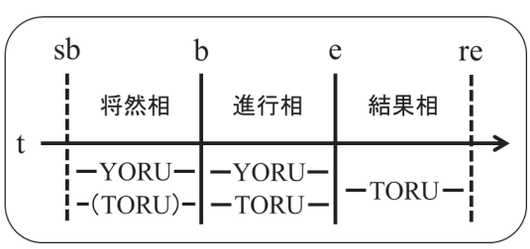

図９　命題αにおけるアスペクト体系（中年層）

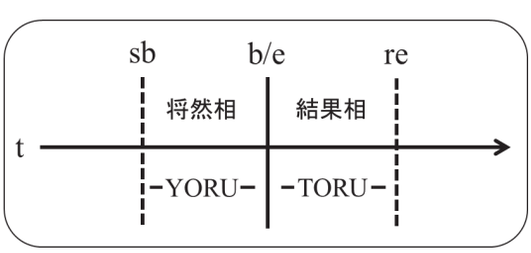

図 10　命題βにおけるアスペクト体系（中年層）

若年層と中年層の方言差は命題 α の将然相で TORU を使用する際の許容度のみである。前述の方言データから見れば、将然相においては

YORU の使用が定着しているのに対して、TORU の使用は定着しきっていないことが分かる。さらに、命題 β の将然相においては TORU の使用が観察されないという事実については、命題 α と命題 β の進行相の有無による時間構造の違いが関与していると考えられるが、これについては今後の研究課題とする。

4.1.3 高年層における調査結果

YORU と TORU が命題 α に生起する場合、高年層では YORU が将然相、進行相、TORU が進行相、結果相を標示する。(12) に例を示す。

(12)「A が走る」のアスペクト
a. PROSP：運動場で走る直前の A がいた
A、走りょーる /* 走っとる
b. PROG：運動場で走っている最中の A がいた
A、走りょーる / 走っとる
c. RES：運動場で既に走り終えている A がいた
A、走っとる /* 走りょーる

(12a) は、命題 α の将然相の局面において、YORU の使用は文法的、TORU の使用は非文法的であることを表している。また (12b) は、進行相の局面において、両形式の使用が文法的であることを表している。さらに (12c) は、結果相の局面において、TORU の使用は文法的、YORU の使用は非文法的であることを表している。

次に集計表を提示する。表 9 に示すように、命題 α における高年層の方言データからは将然相のアスペクト上における YORU と TORU の機能的対立が観察された。

表 9　命題 α の将然相における調査結果（高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、スタートラインの手前で手首足首を回す、走る直前のAがいた	10	10	0	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いて箸と茶碗を持つ、食べる直前のAがいた		10	0	0
【焼く】台所に行くと、フライパンに油をひいて魚に手を付ける、焼く直前のAがいた		10	0	0
【書く】部屋に入ると、机の上に便箋を広げてペンを取り出す、書く直前のAがいた		10	0	0
【降る】カーテンを開けると、空が暗く曇っていて雨が降る直前の天気だった		0	0	10

次に、表 10 に示すように、高年層の方言データからは進行相のアスペクト上における YORU と TORU の機能的重複が僅かに観察された。

表 10　命題 α の進行相における調査結果（高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	10	4	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		10	2	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		10	2	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		10	2	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		10	4	0

さらに、表 11 に示すように、高年層の方言データからも結果相のアスペクト上における YORU と TORU の機能的対立が観察された。

表 11　命題 α の結果相における調査結果（高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた	10	0	10	0
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		0	10	0
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		0	10	0
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた		0	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		0	10	0

表 9、表 10、表 11 より、YORU と TORU の機能的重複は進行相上のみで僅かに生じていることが分かる。進行相における TORU の使用について文法的であると判断したのは半数以下であるため、これについては、非高年層（若年層・中年層）からは観察されない高年層特有の現象として分析する必要がある。

次に、非高年層と同様、YORU と TORU が命題 β に生起する場合、高年層でも YORU が将然相、TORU が結果相を標示する。用例は (11)、集計表は表 4、表 5 と同様であるため割愛する。

以上の方言データより、岡山方言における高年層のアスペクト体系は図 11、図 12 のようになると分析できる。

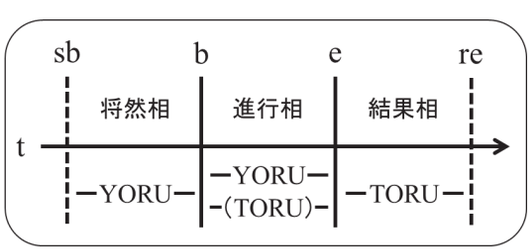

図 11　命題 α におけるアスペクト体系（高年層）

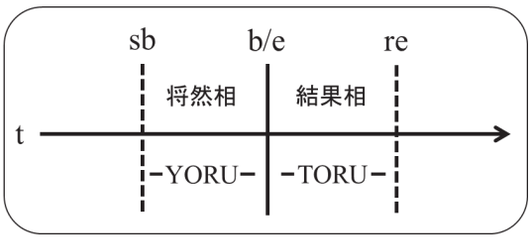

図 12　命題βにおけるアスペクト体系（高年層）

非高年層と高年層の方言差は命題αの将然相で TORU を使用する際の文法性および進行相で TORU を使用する際の許容度である。前述の方言データから見れば、進行相においては YORU の使用が定着しているのに対して、TORU の使用は定着しきっていないことが分かる。

4. 1. 4　アスペクト機能についての総括

統一的枠組みに基づいて網羅的に記述した方言データより、岡山方言におけるアスペクト体系は、命題αにおいてのみ通時的バリエーションがあると分かる。方言の通時的変化プロセスが高年層→中年層→若年層という順序であれば、岡山方言のアスペクト体系の変化プロセスは図 13 のように整理できる。

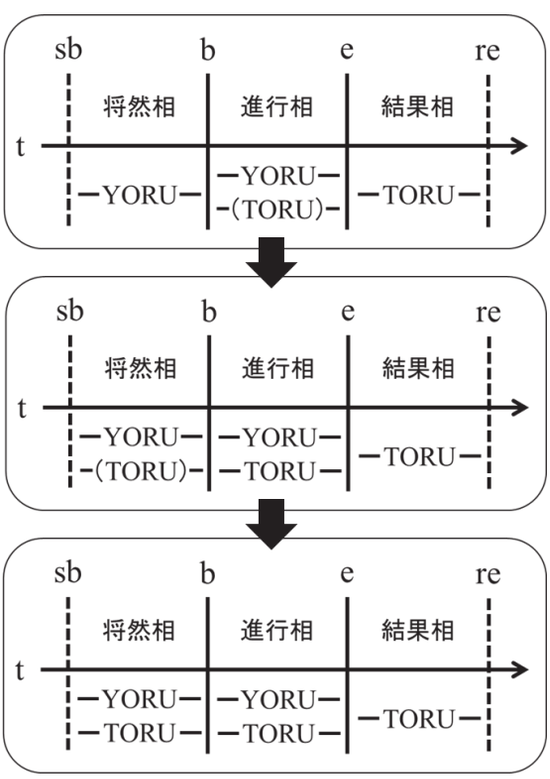

図 13　アスペクト体系の通時的変化プロセス

図 13 より、将然相と進行相を標示する YORU のアスペクト機能は拡張していないのに対して、TORU のアスペクト機能は結果相→進行相→将然相の順序で拡張していると分析できる。よって、岡山方言における YORU と TORU のアスペクトに関する機能的重複は、TORU の意味拡張により生じた現象であると考えられる。

4. 2　YORU と TORU のポライトネス的機能

本節では両形式のポライトネス的機能における調査結果を提示する。ポライトネス的機能における調査は命題αの各アスペクトにおいて、YORU と TORU の両形式を使用すると回答したインフォーマントに対して実施した。

4. 2. 1　非高年層における調査結果

YORU と TORU が進行相上において機能的に重複する場合、非高年層では YORU がニュートラル、TORU が聞き手に対する配慮を標示する。主語を A、聞き手を B として（13）に例を示す。

（13）PROG：運動場で A が走っている
　a.（B= 仲の良い友人）A、走りょーる /? 走っとる
　b.（B= 同年の知人）A、走っとる /? 走りょーる

（13）について、進行相の局面にある命題を B に対して発話する際、（13a）は、B= 話し手が配慮しないような相手の場合（[－配慮]）には YORU の方が自然、TORU の方が不自然であることを表している。一方（13b）は、B= 話し手が配慮するような相手の場合（[＋配慮]）には TORU の方が自然、YORU の方が不自然であることを表している[12]。なお、各インフォーマントに対しては、話し手が配慮しないような相手には親近という基準に基づいて家族・仲の良い友人などを提示し、話し手が配慮するような相手には疎遠という基準に基づいて同年齢の顔見知り・初対面の転校生などを提示した。さらに、（13）のような対立は主語 A の属性（有情性・上下関係・親疎関係）を変更し

[12] ここで表記した自然･不自然という対立は文法的･非文法的という対立とは異なる。YORUと TORUの使用について、進行相を標示するという意味においてはいずれも文法的であるが、インフォーマントが[±配慮] という指標に基づいて、使用するのが相応しいと判断した一方の形式を「自然」、相応しくないと判断した他方の形式を「不自然」として表記する。なお[－配慮] はニュートラル、[＋配慮] は有標である。

ても維持されることから、聞き手目当てにおける対立であると分析できる。これについては 4.3 節で後述する。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する[13]。まず、表 12、表 13 に示すように、若年層の方言データからは、進行相上で聞き手への配慮における YORU と TORU の機能的対立が観察された。

表 12　進行相［－配慮］における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	10	0	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		10	0	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		10	0	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		10	0	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		10	0	0

表 13　進行相［＋配慮］における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	0	10	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		0	10	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		0	10	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		0	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		0	10	0

このような聞き手への配慮における YORU と TORU の機能的対立は、両形式のアスペクト機能が重複している命題 α の将然相においても同様に観察された。将然相［±配慮］における調査結果は進行相［±配慮］における調査結果と酷似しているため割愛する。

一方、両形式のアスペクト機能が重複していない結果相上では、聞き手への配慮における両形式の機能的対立は観察されなかった。主語を A、聞き手を B として（14）に例を示す。

（14）RES：運動場で既に走り終えている A がいた
　a.（B= 仲の良い友人）A、走っとる /* 走りょーる
　b.（B= 同年の知人）A、走っとる /* 走りょーる

（14）は、結果相の局面にある命題を B に対して発話する際、B への配慮の有無に関わらず TORU の方が選択されることを表している。

次に集計表を提示する。表 14、表 15 に示すように、若年層の方言データからは、結果相上で聞き手への配慮における YORU と TORU の機能的対立は観察されなかった。

表 14　結果相［－配慮］における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた	10	0	10	0
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		0	10	0
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		0	10	0
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた		0	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		0	10	0

表 15　結果相［＋配慮］における調査結果（若年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた	10	0	10	0
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		0	10	0
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		0	10	0
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた		0	10	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		0	10	0

また、若年層と同様、中年層においても将然相、進行相上では聞き手への配慮における機能的対立が観察されたが、結果相上では観察されなかった。中年層の方言データは若年層の方言データと酷似しているため割愛する。

以上の非高年層における方言データより、YORU と TORU のポライトネス的機能による対立は、両形式のアスペクト機能が重複する場合のみ生じると考えられる。

4. 2. 2　高年層における調査結果

高年層においても、YORU と TORU は進行相上において機能的に重複するが、高年層からは聞き手への配慮における両形式の機能的対立は観察されなかった。主語を A、聞き手を B として（15）に例を示す。

[13] Y=YORU、T=TORU、他 =その他を表す。各表は各年齢層の話者 10名が自然と判断して選択した結果を集計したものである。

(15) PROG：運動場で走っている最中の A がいた
　a.（B= 仲の良い友人）A、走りょーる /? 走っとる
　b.（B= 同年の知人）A、走りょーる /? 走っとる

(15) は、進行相の局面にある命題を B に対して発話する際、B への配慮の有無に関わらず YORU の方が選択されやすいことを表している。

次に集計表を提示する。表 16、表 17 に示すように、高年層の方言データからは、進行相上で聞き手への配慮における YORU と TORU の機能的対立は観察されなかった。

表 16　進行相［－配慮］における調査結果（高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	10	0	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		10	0	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		10	0	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		10	0	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		10	0	0

表 17　進行相［＋配慮］における調査結果（高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	10	9	1	0
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		10	0	0
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		10	0	0
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		10	0	0
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		9	1	0

また、非高年層と同様、高年層においても結果相上では聞き手への配慮における機能的対立は観察されなかった。用例は（14）、集計表は表 14、表 15 と同様であるため割愛する。

4. 2. 3　ポライトネス的機能についての総括

統一的枠組みに基づいて網羅的に記述した方言データより、岡山方言における YORU と TORU のポライトネス的機能は、アスペクト体系の通時的変化に伴って新たに生じた機能であると分かる。4.1 節で述べたアスペクトの場合と同様に、方言の通時的変化プロセスが高年層→中年層→若年層という順序であれば、岡山方言のポライトネス的機能の発生は図 14 のように整理できる。

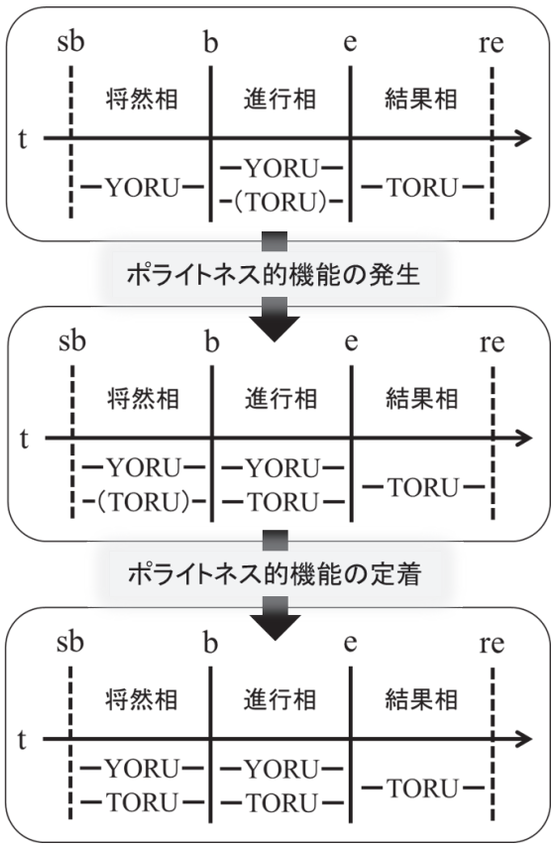

図 14　ポライトネス的機能の発生プロセス

図 14 より、両形式のポライトネス的機能は、進行相上における TORU の使用が高年層→中年層にかけて定着していくのに伴って発生し、中年層→若年層にかけて体系化したと分析できる。よって、岡山方言における YORU と TORU のポライトネス的機能による対立は、両形式のアスペクトに関する機能的重複により生じた現象であると考えられる。

4. 3　配慮の対象について

本節では、岡山方言の TORU が標示する［＋配慮］は命題内容に関わらず、聞き手目当てであるという事実を提示する。前述の井上（1998）と岡（2018）によれば、当該方言のアスペクト形式（大阪方言では TORU、岡山方言では YORU）が標示するポライトネス的機能は命題内容の相違によって生じる。

これについて、本研究では、［－配慮］の会話場面と［＋配慮］の会話場面において各命題内容の相違が形式の選択に影響し得るかどうかを検証する調査を実施した。命題内容は、主に先行研究の記述に基づいて、話し手の心的態度が反映され

る要素である［卑罵・親しさ・心配］の 3 種類を設定した。調査結果を次に示す[14]。

（16）［－配慮］仲の良い友人に対しての発話
a.（電車の中で子供が叫んでいた。それに嫌悪感を抱いたとき）
あの子、叫びょーる /? 叫んどる
b.（電車の中で子供が叫んでいた。それに親しさを感じたとき）
あの子、叫びょーる /? 叫んどる
c.（電車の中で子供が叫んでいた。それを心配に思ったとき）
あの子、叫びょーる /? 叫んどる

（17）［＋配慮］同年の知人に対しての発話
a.（電車の中で子供が叫んでいた。それに嫌悪感を抱いたとき）
あの子、叫んどる /? 叫びょーる
b.（電車の中で子供が叫んでいた。それに親しさを感じたとき）
あの子、叫んどる /? 叫びょーる
c.（電車の中で子供が叫んでいた。それを心配に思ったとき）
あの子、叫んどる /? 叫びょーる

（16）は、［－配慮］の会話場面においては命題内容に関わらず YORU の方が選択されるということを表している。一方（17）は、［＋配慮］の会話場面においては命題内容に関わらず TORU の方が選択されるということを表している。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。表 18、表 19 に示すように、聞き手への配慮における YORU と TORU の機能的対立は、命題内容の相違に関わらず生じる。

表 18　進行相［－配慮］における調査結果
（非高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【卑罵】電車の中で子供が叫んでいるのを見て「うるさいな」と嫌悪感を抱いたとき	10	10	0	0
【親しさ】電車の中で子供が叫んでいるのを見て「かわいいな」と親しさを感じたとき		10	0	0
【心配】電車の中で子供が叫んでいるのを見て「大丈夫かな」と心配に思ったとき		10	0	0

[14] 聞き手への配慮において、YORUと TORUを使い分ける非高年層のインフォーマント 10名に対して調査した結果である。

表 19　進行相［＋配慮］における調査結果
（非高年層）

命題内容	話者	Y	T	他
【卑罵】電車の中で子供が叫んでいるのを見て「うるさいな」と嫌悪感を抱いたとき	10	0	10	0
【親しさ】電車の中で子供が叫んでいるのを見て「かわいいな」と親しさを感じたとき		0	10	0
【心配】電車の中で子供が叫んでいるのを見て「大丈夫かな」と心配に思ったとき		0	10	0

以上の調査結果は、岡山方言における YORU と TORU のポライトネス的機能による対立は、聞き手への配慮の有無に基づいているということを支持している。

5. 結論と考察

前述の方言データより、岡山方言のアスペクト形式 YORU と TORU はアスペクトに関して機能的に重複する場合、YORU は聞き手への［－配慮］、TORU は聞き手への［＋配慮］を標示するという意味でポライトネス的機能において対立すると結論づける。また、アスペクト体系およびポライトネス的機能発生の通時的変化から見れば、命題 α の将然相、進行相における使用形式としては元来より YORU がニュートラルであり、TORU が将然相、進行相を標示するアスペクト機能を得たことで聞き手への［＋配慮］を標示する有標形式に変化したと考えられる。

最後に、TORU という形式は、将然相、進行相および聞き手への［＋配慮］を標示する機能を新たに獲得した元来よりの方言形式であるのか、形態的に近い標準語形のテイルあるいはテルと接触することによって生じたネオ方言形式であるのかについては不明瞭である。引き続き、統一的枠組みに基づいて西日本諸方言を網羅的に記述し、方言間の比較対照や地理的分析を行うことで、西日本諸方言のアスペクト体系およびアスペクト形式のポライトネス的機能の全体像を解明する。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、多くの岡山方言母語話者の方々に多大なるご協力を賜りました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考文献

Brown, P. & S. C. Levinson（1987）*Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, Bernard（1976）Aspect. Cambridge: Cambridge University Press.

井上文子（1998）『日本語方言アスペクトの動態－存在型表現形式に焦点をあてて－』東京：秋山書店 .

鴨井修平（2017）「方言データから見る持続形式の意味拡張－岡山方言を中心に－」同志社大学大学院文化情報学研究科修士論文 .

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63.（金田一春彦（編）（1976）『日本語動詞のアスペクト』5-26. 東京：むぎ書房に再録）.

国立国語研究所（編）（1999）『方言文法全国地図 第 4 集 表現法編 1』東京：財務省印刷局 .

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』東京：ひつじ書房 .

工藤真由美（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京：ひつじ書房 .

Martinet, André（1962）*A Functional View of Language.* Oxford: Clarendon Press.

虫明吉治郎（1982）「岡山県の方言」『講座方言学 8 －中国・四国地方の方言－』59-101.

岡実咲（2018）「岡山方言のアスペクトに関する研究：シトルへの一本化に伴うショールのムード化について」『岡山大学国語研究』32, 13-25.

奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（上）」『教育国語』53, 33-44.

奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって（下）」『教育国語』54, 14-27.

Vendler, Zeno（1967）*Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.